書 評

日本の農薬市場2020—農薬出荷統計からみた—: 上山功夫
著/合同会社農食テクノインフォ/ 2020年/ 147ページ/
本体20,000円(税別)

世界の人口は2017年に73億人に達し、2050年には97億人まで増加すると予想されている。農業の生産を安定的に向上させ十分な食料を確保するためには、病害虫や雑草の適切な防除は極めて重要である。優れた農薬の開発は日本を始め世界の食料問題の解決に直結しており、新規農薬の創製研究が各地で精力的に進められている。一方、開発・上市された農薬の全般的な使われ方、普及状況、作物保護への貢献、さらには開発企業ごとの農薬製品の動向などに関する“農薬の市場動向”を把握することは、植物防疫を適切に遂行するうえで極めて重要であり、かつ新規農薬のニーズを把握し、市場が求める農薬を開発するうえでも重要である。

これまでのわが国における農薬の普及状況や市場動向を知る上で、(一社)日本植物防疫協会が毎年発行している「農薬要覧」は極めて有用な資料で、そこには農薬製品の剤型名、生産量、出荷量、生産金額、会社名、県別出荷量、農薬の輸出・輸入、登録情報などに関するほぼすべてのデータが網羅されている。しかしながら、原体別出荷量や会社別出荷量、また殺虫殺菌剤という区分けの存在のために殺虫剤、殺菌剤としての総出荷金額が読み取りにくい。また、データの集積から出版までの期間(数年)を考慮すると、新規登録剤を含む最新の農薬に関する情報が得られ難い。そのようなことを勘案し、本書では、「農薬要覧」に掲載されているデータをベースに“殺虫殺菌剤などの混合剤の出荷金額を各原体に振り分ける場合には合計出荷金額を出荷量に比例配分する”、“同一製品を複数の会社が扱う場合は合計出荷金額を出荷量に比例配分する”などの工夫を施している。結果として、原体ごと、農薬会社ごとの出荷金額を算出することを可能にし、日本の農薬市場がほぼ正確に把握できるようになった。

本書では、日本の農薬市場、農薬出荷の全体像を、過去30年間と過去6年間(2013–2018年)に分けて概括するとともに、2013年以降の殺虫剤、殺菌剤、除草剤、植物成長調節剤等について、市場別・分野別・薬剤別に出荷動向を詳述している。他の市場調査書とは異なり、単なる数字の羅列にとどまらず、取り扱う製品の化学構造式を付記するとともに、それぞれの剤の市場動向に関する簡潔な解説文が記載されている。わかりやすいカラー図表も多用されており、内容

の理解の助けとなる。また、日本に拠点を置く30社にも上る農薬企業について、各社の農薬製品の売上規模と主要な農薬製品の出荷金額、輸出金額データが、農薬事業の概要に関するコメントと共に取りまとめられており、使い勝手がよい資料となっている。

本書では、取りまとめに採用したデータベースの関係で市場分析から漏れる恐れのある“2018年以降本書出版時点までに新規登録された農薬”や“ISO共通ネームがつき、日本で農薬登録されると予想される化合物”についても、独自の項目を設け市場動向の概要が収録されている。

執筆者の上山功夫氏(株式会社化学分析コンサルタント技術顧問、日本農薬学会第16期副会長)は、バイエルクロップサイエンス株式会社取締役研究本部長や独バイエル社のプロジェクトマネージャー等を歴任され、第11回IUPAC農薬化学国際会議(神戸、2006年)を始め多くの農薬関係の国際会議の開催にも尽力された。長年にわたり農薬の研究開発へ携わった経験が、本書の使い易さに繋がっていると思われる。日本の農薬市場の動向を一目で鳥瞰できる本書は、農薬学会の会員はもとより農薬の製造・流通・販売に携わっている方々や植物防疫事業関係者にとって必携の一冊と思われる。

(吉備国際大学農学部 梅津憲治)